様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１　年　４　月　２３　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８５３０７５３
研究課題名（和文）　広汎性発達障害幼児への身体を介した早期発達支援
―　共同注意行動獲得を指標として　―
研究課題名（英文）　The early developmental support using the body for autistic infant children - coding by Joint attention behavior -

研究代表者
森崎　博志（MORISAKI HIROSHI）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０２９４８５７

研究成果の概要：３年間を通し、幼児通園施設において発達支援の実践活動を行った。身体的相互交渉を通し対人的基盤を育む本実践により、ほぼ全員の対象児に共同注意行動を含む対人面での良好な発達が見られた。本研究の実践を通し、自閉症児において困難とされる共同注意行動に発達的変化が見られたことは意義深く、本研究の大きな成果と言える。また個別実践では、ビデオ分析による共同注意行動の詳細な発達的推移を示すデータを得た。これは、発達支援の実践研究等において従来示されていない、本研究における最も重要な成果と言える。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	８００，０００	０	８００，０００
２００７年度	３００，０００	９０，０００	３９０，０００
２００８年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	１，６００，０００	２４０，０００	１，８４０，０００

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：発達支援、広汎性発達障害、共同注意、身体

１．研究開始当初の背景

自閉的な子どもに対し、発達支援、教育支援を如何に実践し、特に、共同注意行動を中心とする社会的行動様式の発達を如何に育んでいくべきかという点については、まだ、充分な検討はなされておらず、発達臨床、特別支援教育における極めて重要なテーマとなっている。

私は、自閉症児を始めとする様々な発達障害児を対象に、遊びや動作法による身体的相互交渉を媒介に発達支援を長く実践してきた。特に対人相互性に大いに関与すると考えられる共同注意に関する知見を積極的に取り入れ、その意義を実践的に検討してきた。自閉的な子どもに対し、遊びを含めた身体的相互交渉を媒介に共同注意を成立させ、「自己－他者」という対人認知や３項関係としての共同注意行動を育む実践を続けてきた。

しかし、通園施設などとの協力の下、より多くの事例や集団での実践を通して検討を深めていくことが必要と考えられた。

２．研究の目的

身体的相互交渉を基盤に、子どもと眼差し

を交わし共同注意の成立を意識する関わりが、子どもの対人認知を深め、「共同注意行動の発達にも繋がることについては、これまでの実践からある程度手応えを得ている。しかし、障害の程度や年齢の要因も含め、より多くの事例を基に更に検討を深めることが必要である。

また、発達支援を通した共同注意行動の獲得過程については、ビデオ分析も含めより詳細に検討する必要がある。加えて、共同注意行動の発達は、より早期の幼児を対象に検討していくことが望ましい。長期的な視点からも、早期から発達支援が展開されることは大きな意義がある。

以上を踏まえ、本研究では、幼児の通園施設において、自閉的な幼児を対象に、遊びを含めた身体的相互交渉を基盤に、共同注意の成立を通した他者認知の形成、対人相互性を育む支援を実施する。そして、幼児期におけるこの実践の発達的意義について検討することを目的とした。

３．研究の方法

幼児通園施設において発達障害児を対象に、動作法をベースとした身体的相互交渉を通し共同注意を成立させ、対人的基盤（対人認知）を育む実践を行う。

セッションは週 1 回 60 分で、私が日頃指導している学生と当該通園施設の職員がトレーナーとして、毎年 10 名程の子どもを対象にマンツーマンで実践を行い、私がスーパーバイザーとして全体の指導に当たった。

全対象児に記録用のファイルを用意し、毎セッション後に記録を記入した。ビデオカメラでも記録を行った。また、セッション以外の園内の日常の行動や家庭からの報告については施設職員により記録が行われた。

４．研究成果

本研究における発達支援の実践活動を通して、毎週 10 名程、年間 40 セッションで、３年間合計述べ 1200 名程の子どもたちへの実践活動を継続的に実施することができた。まずはこのような発達支援活動を継続できたこと自体が、一つの大きな研究の成果とも言える。そして、就学前の発達的に極めて重要なこの時期により良い発達支援の機会を提供することができ、今後のより良い発達の基盤を多少なりとも形成することができたこと、そして、通園施設内に止まらず、保護者の方々の理解も得ながら地域に根ざした活動として定着していき、本研究で行ってきた動作法をベースとした発達支援活動が、今後も当施設を中心に継続して展開されていく基盤を形成することができたということが、一つの大きな研究活動の成果と言えよう。

このような発達支援の実践活動や、それに関連する実践活動を通して得られた研究成果としては、（１）集団での実践事例、（２）個別実践での共同注意行動の詳細データ、（３）他障害児（重度障害児）における共同注意行動の発達支援、そして、（４）本研究で行った発達支援の実践ハンドブック作成、に分けられる。これらそれぞれについて、以下にその概要を示す。

（１）集団での発達支援活動について

集団での発達支援活動には毎年 10 名程の子どもが参加した。集団での発達支援は障害の程度やタイプも様々であり、データの継続的な収集と整理などに困難があり、全てを研究論文として公表することはできないが、ここでは典型的な５名の事例についてその概要を示す。

①動作法プログラムによる効果の現れ

ここに示す事例は、a）R・H・N 児に示される典型的な自閉症児の発達例（行動の落ち着き・対人志向性が顕著に高まったタイプ）、b）K 児に示される軽度自閉症児の発達例（自己肯定感・主体性・自己コントロール能力などが顕著に高まったタイプ）、c）C 児に示される重度知的障害を併せ有する自閉症児の発達例（行動の落ち着き・対人志向性の高まりが見られたタイプ）という 3 系統に分類され、b）以外はこの取り組みを通した成果の現れ方の傾向は同様であった。C 児の自閉傾向は重度知的障害を基盤にしたものであり、支援による発達の現れ方は a）と同様であるが、速度は緩やかであり、身辺自立獲得や言語発達にはさらに時間のかかるものと思われた。

また、程度の差はあっても、今回示した以外の対象児も含め、ほとんどの子どもにおいて対人的な志向性に高まりが見られ、園や家庭での日常生活場面において対人的な疎通性が良好に変化していったことが最も大きな特徴と言える。そして、大きな意味での人への関わりだけでなく、多くの子どもにおいて言語発達や共同注意行動の発達にも繋がっている所が見られた。これは、今回の発達支援プログラムを通して、他者をしっかりと認識し他者と注意を共有する体験を継続して重ねたことによるものと考えられる。

②発達検査に見られる変化について

「小児自閉症評定尺度（CARS）」、「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表」による発達検査にも大きな発達が示された。「CARS」からは、全ての対象児で自閉傾向が低減したことが示され、どの対象児も特に「人との関わり」や「模倣」の得点に大きな変化が見られた。また、「遠城寺式発達検査表」でも、どの子においても全体的な発達が示された。自閉症

児は社会性の発達に特に困難を示すが、どの対象児も「対人関係」、「基本的習慣」「言語理解」は特に大きな伸びが見られた。

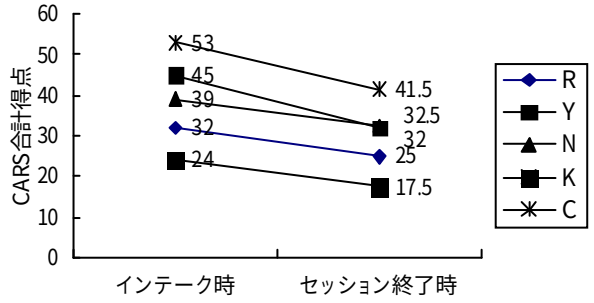
当初、対象児５名は、落ち着きがなく、対人的応答も少なく、やりとりの難しい状況であったが、半年～１年の短い訓練期間で「全体的な行動の落ち着き」や「他者への関心と、能動的な関わり」、言語や身辺自立など、日常的な行動においても大きな変容が見られた。これは、援助者と楽しく身体を介してやりとりすることや、援助者と視線（注意）を共有することを重視した取り組みが、他者と関わる力を育むことはもちろん、自閉傾向軽減による幅広い成長を促す可能性を示唆するものと言える。

なお、ここでは重度から軽度の各タイプを代表する典型事例５名のみについて示したが、今述べた傾向は、程度の違いはあれ、その他ほぼ全員の子どもたちにも共通して見られたものであった。

③動作法プログラムの展開と課題

本研究では、通園施設と協力して取り組みを行ったことで、職員は以前に比べて子どもの発達に目が向くようになり、日頃から身体を介した働きかけの活用も場面に応じてできるようになった。また、親も子どもと関わることの大切さを知り、家庭でも活動を取り入れるケースも見られた。

今回は動作訓練歴１～３年の初心者がトレーナーを担当したが、短期間の実施でも充分な成果が得られた。母親や職員でも比較的簡易に実施できる体遊び的な本プログラムを、発達的な可塑性や可能性の高い、発達早期の子どもたちに実施することは、その後の学校、生活場面への適応を考えていく上で、大変重要な発達的意義があると考えられた。



CARS得点の変化

（２）個別実践での共同注意行動の詳細データについて

集団での発達支援活動を通して、本研究のプログラムが自閉的な子どもたちの対人志向性を高め、共同注意行動を含む対人的行動の発達に繋がること、また自閉的な傾向を低減させることなどが対象児全体にある程度共通して見られることは明らかになってきた。しかし、一連の共同注意行動の中で、「アイコンタクト」や「指差し理解」、「指差し産出」など個々の共同注意行動に、本研究のプログラムの実施に伴って、有意義な発達的変化が見られるのか、また見られるとすればその発達のプロセスはどのようなものとなるのか、という点については集団でのデータ収集には困難があり、個別でのより詳細な検討が必要であった。そこで、典型的な自閉症児（当時３歳２ヶ月）１名を対象とし、２年４ヶ月（全８期：73 セッション）に渡り事例的に詳細な検討を行った。ここではそのデータを示す。

①　全体的な行動変容について

１～８期の約２年４ヶ月の関わりを通して、対象児の行動には様々な変容が見られた。１～４期のセッションにおける大きな変化としては、２期に要求の指差し産出、３期に表象遊び、４期に「あけて」、「きて」などの自発的な要求語とオウム返しでの２語文の表出が見られたことがあげられる。１～４期を通して対象児は、援助者と注意を共有しながら楽しく遊べる場面が少しずつ増え、言葉の数や種類も増えるなどの発達を見せた。日常生活においても、母親との関係が深まり、飛び出し行動が減少するなど行動の自己調整力もついてきた。しかしながら、今一つ視線が合わず落ち着かない、注意を充分持続できない面なども見られ、他者に注意を向けやりとりする部分にはまだ弱さが感じられた。

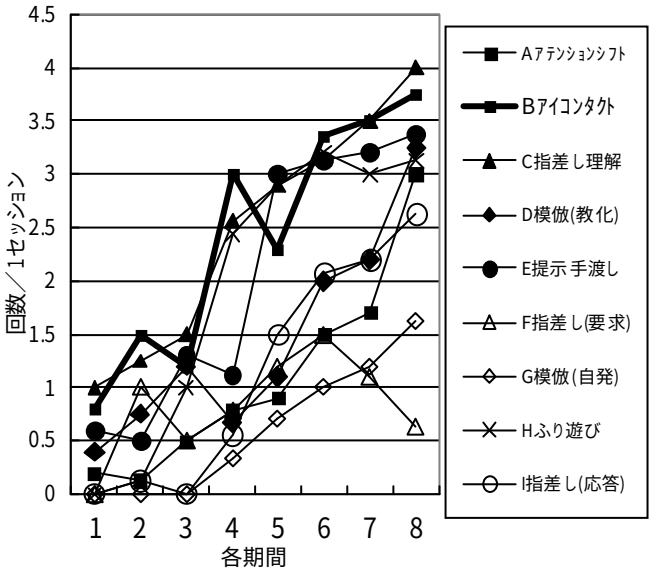
そこで、５期より、対人的な行動の基盤となる他者認知をよりしっかりと育むことを意識し、さらに積極的に動作法による身体的相互交渉を通しながら「眼差しを交わすこと(対面)」、「３項共同注意(指差し動作)」、「模倣動作」などを取り入れて実践した。その後の大きな変化としては、６期に動作課題で指差しでの腕上げができるようになり、視線の一致が持続するようになったこと、７期に「○○ちょうだい」などの自発的な２語文の表出が見られたこと、８期に遅延模倣と役割交代での模倣ができるようになったことがあげられる。

②各共同注意行動の出現頻度について

全セッションを通した各共同注意行動の変化は図の通りであり、「C.指差し理解(視野内)」→「F.指差し産出(要求)」→「B.アイコンタクト(初期的)」→「D.模倣(教化)」→「H.ふり遊び」→「B.アイコンタクト(遠距離)」→「C.指差し理解(視野外)」→「G.模倣(自発的)」→「E.提示手渡し」→「A.アテンションシフト」という順を辿っていた。特に動作法の取り組みを重視した 6～8 期に、「B.アイコンタクト」の持続が長くなり、「C.指差し理解(視野外)」は視野外においても安定して見られるようになった。それに伴い、他の行動も大きく増加している。また、「D.大人の

教化による動作模倣」、「G.他者の行為を理解したことによる動作模倣」については、模倣課題を取り入れた効果が現れたものと考えられる。

このように、本研究の発達支援プログラムを通し、自閉症児においては困難とされる共同注意行動全般に大きな発達的変化が見られたことは極めて意義深いことであり、本研究の非常に大きな成果と言える。また、自閉症児における個々の共同注意行動の発達的推移をこのように詳細に示したデータは、自閉症研究、発達支援の事例研究等においてもこれまでに示されていない極めて貴重なものであり、本研究における最も重要な成果と言える。本事例についてはさらに検討を深め学会誌にも投稿する予定である。

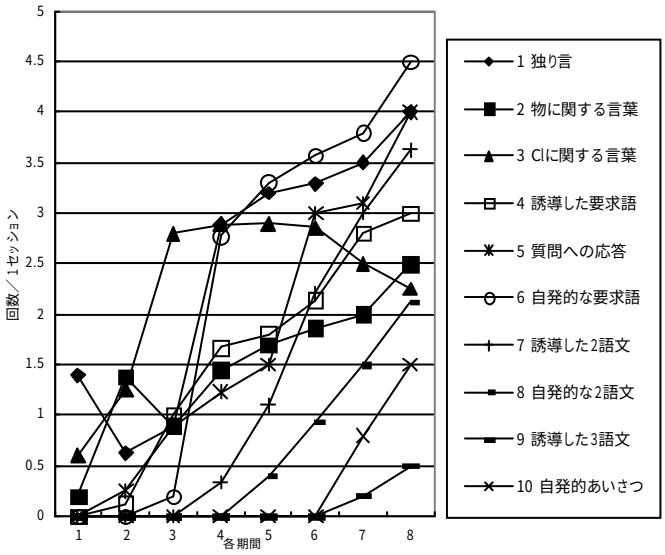


各共同注意行動の出現頻度の変化

③　言語発達について

対象児の表出言語の発達的変化は図の通りであり、【1 期】独り言、【2 期】オウム返しの言葉、【3 期】誘導した(オウム返しの)要求語、【4～5 期】自発的要求語(１語文)、【5～6 期】誘導した要求語(２～３語文）、【7～8 期】自発的な言葉（２語～３語文）、自発的あいさつ、という順に発達した。Th は Cl の言語理解の状況に応じ、分かりやすく、繰り返し易い言葉で話すよう心がけていた。援助者は、まずは体遊びの中で Th の言葉のオウム返しを引き出し、自閉症児がオウム返しで要求語を言い始めた後は、＜なに？＞＜○○どうするの？＞などの質問によって、Cl が自発的に言葉を発する機会、言葉の使い方を知る機会を、意識して作り出す（Cl の言葉を引き出す）ことが大切であると考えられる。

また、本研究のプログラムを通して、このように言語にも大きな発達的変化が見られたことも非常に大きな成果と言える。本研究では単独に言語訓練を行ったわけではなく、身体的な相互交渉を通して「自己－他者」という対人的基盤を育む取り組みを行った結果、対人行動の様々な面に良好な変化が見られ、言語面にも発達が見られたのである。このことは本プログラムが言語を含む様々な対人行動の基盤を育むものであることをあらためて示したものと言える。



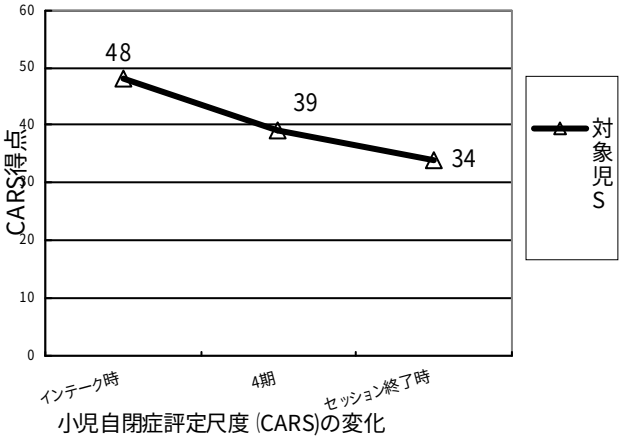
①～⑩の言語が発せられた回数と各期における割合

④　発達検査に見られる変化について

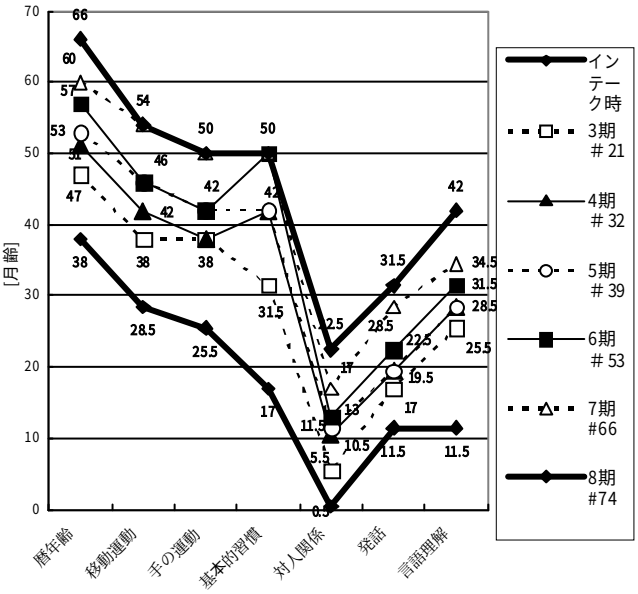
「小児自閉症評定尺度(CARS)」と「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表」の結果を以下に示す。「CARS」得点は、インテーク時 48 点(重度自閉症)、終了時 34 点(中・軽度自閉症)であり、対象児の自閉傾向が大きく弱まったことが示された。特に変化の大きかった項目は、２点減少「模倣」、1.5 点減少「人との関係」、「非言語性のコミュニケーション」、１点減少「身体の使い方」、「物の扱い方」、「視覚による反応」、「恐れや不安」、「言語性のコミュニケーション」、「活動水準」、「全体的な印象」であった。特に「模倣」や「人との関係」に大きな変化があったことは、本研究で自閉症児の「自己調整」と「他者認知」を育むことをねらいとし、積極的に「眼差しを交わすこと(対面)」、「３項共同注意(指差し動作)」、「模倣動作」などを取り入れて実践を行ってきたことの結果が現れたものと考えられる。

「遠城寺式発達検査」でも、全体的な発達が示された。自閉症児は社会性の発達に特に困難を示すが、4 期に「対人関係」が 10 ヶ月の発達を示した後、「基本的習慣」、「対人関係」、「発語」、「言語理解」は 7～8 期に特に大きな伸びを見せた。動作法を重視した取り組みによって、「他者認知」や「自己調整」の力が伸び、日常生活で他者をさらに

深く意識した関わりが持てるようになったものと考えられる。



小児自閉症評定尺度（CARS)の変化



遠城寺式･乳幼児分析的発達検査結果

（３）他障害児（重度障害児）における共同注意行動の発達支援について

また、さらに対象を広げ、より重度な子どもも対象とし、関連する特別支援学校での自立活動としての個別の実践も行った。これは、動作法をベースとした本研究の実践をより重度な子どもを対象に実施し、共同注意行動がどのように発達していくかを中心に、全体的な発達の様相について検討しようとしたものである。

その結果、重度の子どもにおいても一連の共同注意行動や、生理的指標、情緒面など他の側面も含め大きな発達的変化が見られた。これは、本研究における発達支援プログラムが、自閉症という特定の障害特性に対して効果的であるということよりも、むしろ人として共通する対人的な発達の基盤そのものを大きく育んでいく可能性のあるものであることを示すものと考えられる。

これについては関係学会で事例研究として既に発表し、研究論文としてもまとめている。本研究の発達支援プログラムを通して、重度の障害児において共同注意行動全体が大きく発達したことは非常に意義深い点であり、またその際の個々の共同注意行動の発達プロセスを詳細に示した今回のデータは、従来にない極めて貴重なものと言える。

なお、重度障害児においては生理指標にも変化が見られたが、これは身体的な働きかけによる面が大きいものと思われる。いずれにしても、重度障害児については、今回の研究においては試行的な取り組みであり、今後さらに検討していく必要があろう。

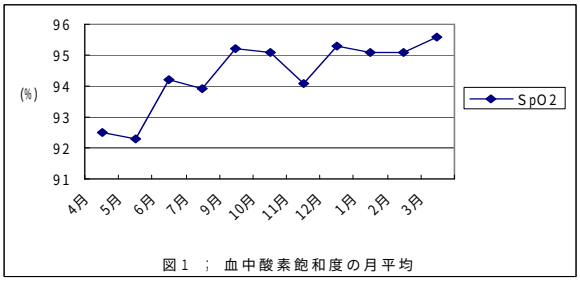


図１ ； 血中酸素飽和度の月平均

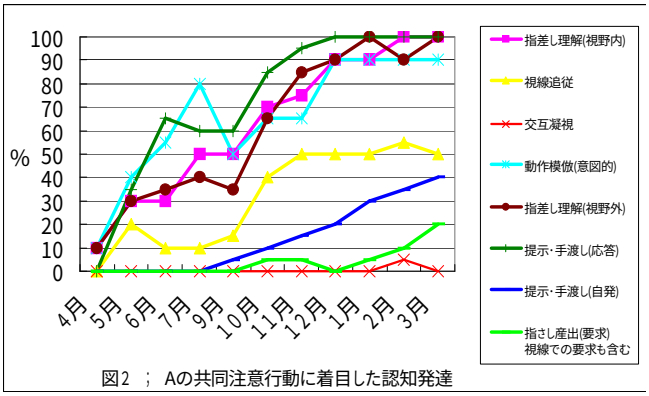


図2 ； Aの共同注意行動に着目した認知発達

（４）本研究の発達支援プログラムの実践ハンドブックについて

本研究においては動作法による身体的相互交渉をベースにしながら、共同注意の発達的視点を取り入れ、独自の発達支援プログラムを実施してきた。結果として、上記にも示したようにこの方法の発達的意義の大きさがより明確に確認されたものと考えている。

このような実践は、通園施設や学校、家庭など、日常の活動の中により広く取

り入れられていくことが望まれる。このようなことから、本研究の発達支援プログラムの実践について、私自身の視点による新たな理論的な背景の基本を整理するとともに、具体的な実践の手続きの在り方や、事例などを整理したものを研究論文として今回まとめた。加えて、本研究での実践を通し比較的経験の浅い学生や施設職員などに指導を続けた経験やデータを基に、主に初心者を対象として、本研究の発達支援プログラムの基本的な考え方（理論）と具体的な手続きを整理して掲載した実践ハンドブックを作成した。これは、広く活用してもらうために、初心者にも分かりやすいよう配慮しながら基本的な内容に絞り、図や写真も多く用いて作成したものである。今後、関係の諸機関などに配布するとともに、研修会なども通して広く提供していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 ６ 件）

① 森崎博志　2009 自閉症児への動作法－理論的背景と基本的な手続きについて－, 治療教育学研究，29，19－26．査読無
② 小柳津和博・森崎博志　2009　自立活動の五つの区分における動作法の教育的効果－呼吸やコミュニケーションに変化があった重度重複障害児の事例－，障害者教育・福祉学研究，５，51－57．査読無
③ 柴田和美・森崎博志　2008　自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究Ⅱ, 治療教育学研究，28，75－83．査読無
④ 森崎博志　2007　自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究－通園施設での取り組み－, 障害者教育･福祉学研究, ２，63－70．査読無
⑤ 森崎博志　2007　自閉的な子どもへの動作法をめぐって，東海・北陸心理リハビリテイション研究会会報, 25, １－５．査読無
⑥ 柴田和美・森崎博志　2006　身体を介した関わりと自閉症児のコミュニケーション発達, 東海･北陸心理リハビリテイション研究会会報，24，18－23．査読無

〔学会発表〕（計 ３ 件）

① 小柳津和博・森崎博志　2008　重度重複障害児への体を通した発達支援とその教育的意義－共同注意行動と血中酸素飽和度を指標として－，日本リハビリテイション心理学会．2008 年 12 月５日．熊本全日空ホテルニュースカイ（熊本市）.
② 森崎博志　2007 自閉的な子どもへの動作法をめぐって，東海・北陸心理リハビリテイション研究会大会．2007 年 6 月 16 日. 長良川スポーツプラザ（岐阜市）.
③ 柴田和美・森崎博志　2006　身体を介した関わりと自閉症児のコミュニケーション発達，東海・北陸心理リハビリテイション研究会大会．2006 年 6 月 4 日．ホテルオースプラザ（名古屋市）.

〔図書〕（計 １ 件）

① 森崎博志・小柳津和博・船橋篤彦　2009 身体を通した発達支援－最も基本的なボディーワーク－, １－32. ブラザー印刷.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

○取得状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
森崎　博志（MORISAKI HIROSHI）
愛知教育大学・教育学部・准教授